日本労働新聞

神戸市兵庫小出張所 今日発売
発行所 日本労働新聞社
編輯兼発行人 森脇甚一
電話大阪(六〇一四)七番
毎月二回発行 九日二十日
営業部 倉方銭 郵税五厘

創刊一週年に當つて

日本労働新聞社長　森脇甚一

謹める胸の手綱を緩めて、過ぎし方を顧みれば既に満一年我が「日本労働新聞」評論途半ばにして斃れざる風雨幾萬の行程より打ちみれば殆んど短かき日子には相違ないが、きりとして其三百六十五日、雨に風に世と闘ひ人とせめぎ、奮闘幾千度の今日、顧真不盛衰飽き無き無資本家に強烈なる刺戟を與へ、飛れる彼等の資本主義より歩一歩労働真理の聲さへ知覚せしめつゝあるは正に我社の時にして而かも労働者の味方である。我社が始めて本紙を創刊したのは昨夏彼の川崎、三菱が横暴なる覺手を揮つて我等の兄弟を壓迫し所謂労働爭議の餘憤を包んで暖骨鐵工な片ツ端より逐ぎ倒し、残る烏合の衆を顧使して資本主義を強ふせんとすゝ共狂瀾沙汰に憤慨し、既報一番以て手に唾して起つたのが即ち本紙の起源である換言すれば日本労働新聞は誠首職工の一團が獣身的自己犠牲の發露から、石に噛ひ付いても合理的運動を永久に續く可く創立したものである。

云ふ迄も無く労働運動の恒久的目標は人類の解放と文化社會の現出であつて愛と自由は我等の精神である。而かも吾人は幸ひ此の崇高を遂げ大精神に則り終始し公正の道を過つて今日に至つて居るから、例令其發行期間が僅々一年にしか成らないにしても、其内的努力と効果に至つては一面快心の微笑を浅きざるを得ないのである。然り吾徒は今や此一年の思出多き記念日を迎へて過去一年間の労働運動界を回顧する時、吾等労働者が昔つて通り來りし運動にも幾多の缺陥のありし事を自省ざるを得ないのである。本紙の發展と同じく労働運動も過去一年間に於て異常の發達を遂げてゐるが、時に其眞目的を外づれ歩調を行つて目的さへ忘れ去らんとするが如きもある。

要するに労働者は資本家よりも總ての點に於て自覺の閃に富み日一歩月一歩着々として人類相互の榮榮の爲めに貢献しつゝあるが、資本家の多くは依然として舊弊を固守し壓迫的威力を以つて尚ほ労働者の自由な束縛して居る。吾人は此等の事例を観る秋我等の努力と奮闘は正に是れからであると考へるのである。正義は必ず最後に於て勝利を占むる物である。一時の勝敗は吾人の憂ふる處でない、而かも吾徒は年一年と共に共所期の目的に近づきつゝあるの時、滿一周年を迎へて之な記念するは尚に吾徒が目的の勝利に向ふ一道程であつて欣ぶ可き事である、願くは大方各位に於かせられても更に大なる御後援の榮を賜へ。

反民業的内閣

一

世の中に何が間違つて居るつて現内閣の出現ほど間違つたものはあるまい、憲政の常道を外づれた内閣が是れ程八釜しい大正の新時代に成立して世態人心を一新しやうと云ふのだから滑くちやないか、元來此閣内は貴族院の研究會を背景とする點に於て感心が出來ぬ内閣で貴族院の研究會は不良貴族の集團であると世人から指彈を受けて居るのみならず逓信大臣の前田利定などは就中非難の多い人である、綱紀粛正の高調せらるゝ今日不良貴族の集團として指彈さるゝ研究會を背景とする現内閣は其成立當時から間違つて居るのである、換言すればデモクラシーの高唱せらるゝ今の世の中に一部特産階級の代表機關たる貴族院を中心とする現内閣は慥かに吾等の歓迎出來ない内閣である、況んや其出現に際して最も盡力した元老松方正義は其一門の救濟を目的として加藤大將を推薦したとも噂されて居るのみならず見來る所總べて其行り方は非立憲的であるのは遺憾である、否な斯様な事を吾人が思ふさへも間違つて居るかも知れないが、何んとなれば松方侯は